

第 2 部講演

子どもひとり

育てるには

1 つのまちが必要です

平野 直己

(北海道教育大学札幌校臨床心理学研究室)

岩見沢市の子ども・子育ての現状



平野直己さん
(北海道教育大学)

皆さんこんにちは。僕は、平成 25 年から岩見沢市子ども・子育て会議の会長を務めている平野と言います。

今日は「子どもひとり育てるには、1 つのまちが必要です」と

いうタイトルで 50 分くらいお話しいたします。

先ほどの岩見沢市の子ども・子育ての現状を聞いて皆さんどう思いましたか。

ここには、保育園・幼稚園に関わる方々がたくさんいらしています。結構深刻だということはわかっていただけたでしょうか。何百人かずつ、子どもたちが消えていっているということです。

保育の量は充足していきますというのは、保育園が増えたおかげではなく、子どもたちが少なくなっているからということなのです。つまり、子どものいなくなる町がこれから、目の前にあって、これにどうしたらいいだろうかということが、悩ましいことなのです。

子どもが少なくなっていく

もう皆さんはご存知だと思うのですが、子どもが少なくなっている理由というのは様々です。一番大きいのは、結婚しない人たちが多くなっているということはもちろんあるでしょう。初婚年齢もどんどん高くなっています。女性は 30 歳を超えたはずです。初婚年齢が 30 歳ということは、子どもが生まれる年齢はそれより高くなるわけですから、そうなってくると出産は体を使って行うことなので、なかなか大変だということです。

医療の力で子どもをつくる時代

今、札幌市の街中には、不妊治療のクリニックがたくさんできてくるようになりました。そこにはたくさんの人たちが通院しています。20 代の人も通院していると聞きます。今は、どのくらいの方が不妊治療で、つまり、こういう言い方をすると不快に感じられる方がいるかもしれませんが、両親の性行為を通さずに生まれてくる子どもたちが増えているということです。

僕の知っている範囲だと全出生数の約 5 %の乳児は、おしべとめしべがなんとかという話ではなく、医療の力で生まれてくるという時代がきているわけです。そのぐらいしても子どもがほしい家族がいるわけです。だけど、そこもうまくいかないこともあったりしています。そういう中で、子どもたちが生まれてくるという状況です。

少しでも、本当は子どもたちがたくさん、この町で育ててくれたらいいなと思うんだけど、なかなか世の中の構造がそんなふうになっていないという状況があります。他の町からも、子育ての人たちに住んでくださいという形になると、今度取り合いということになります。これが今日本中で起こっていることです。

僕も、心理学という立場で、子育てのことやその乳幼児のメンタルヘルス、子どもと保護者のメンタルヘルスを行っている人間として、こういうことに何かできないかということで、子ども・子育て会議に関わらせていただいているというところです。

子どもひとり育てるのには、1 つのまちが必要

今日のタイトルは、「子どもひとり育てるのには、1 つのまちが必要」というタイトルにしました。実は、このタイトルは、もともとあるものを今回の講演に合わせて変えたものです。もともとは、It takes a village to raise a child というアフリカのことわざで、直訳すると 1 人の子どもを育てるには村がまるごと 1 つは必要ということになります。

これは世界中で引用されることわざで、ヒラリー・クリントンさんも本のタイトルにしています。

子どもひとり育てるということは、家族だけ、お父さんお母さんさえしっかりしていればいいのでしょうか？ということを知りたいのです。



セミナー会場の様子

岩見沢市の中で子どもが育つにはどうしたらよいのか

このことわざは、家庭レベルの問題ではなくて、1つの村の全員が子どもを育てているんだという意識を持っていかないと、子どもたちは育たないですよということを言っているんだそうです。今日のテーマともすごく関わっているわけです。結局、岩見沢市の中で子どもが育つにはどうしたらいいんだろうかということを考えないと、家族の人に子どもを産んでくださいといっても、問題は解決しないわけです。どこかの議員さんたちの中には、少子化を女性の問題だとするかもしれないけど、でもそういうことではなくて、実は村の問題、町の問題なんだという考えを持っていただきたいのです。自分が当事者として考えるということです。

子育てに対してリスクを抱える家庭

今回のニーズ調査の集計結果を見てもう一つ私たちがショックだったのは、こういう研修の場を作っても、そこに来ない方々、来るチャンスがない方がいらっしやる。そういう方々は、むしろ本当は子育てに対して色々なリスクを抱える方々なんだというデータが出ているということです。

所得というところでしか見ていないですけども、そういう方々に向けて子育てのことで応援したいんだよとメッセージを出しても、あまりそのことに関心を持っていただけないという状況があるということです。

ただこうして研修会だけ開けば良い町になるかといったら、全然そうではないということがわかった

わけです。その人たちのそばに行くことがとても重要で、そういうチャンスがあっても、チャンスを捉えていきたいと思いますと言ったとしても、そのこと自体に関心を持ってずについて、それより生活が大変だという方も、もしかしたらいるのかもしれない。そういう人たちの傍ら、お隣に行くためには、その人たちと一緒に居られるようになるためには一体何が必要なんだろうかということも、誰かが考えればではなくて、みんなで考えなくてはいけないという時代が、もう来ているということです。

コミュニティとは何か

特に北海道は少子化で有名な都道府県の1つで、絶滅危惧種になりつつあります。これをどうするかは、本当に深刻な課題です。今日は、コミュニティの話の色々していきます。まず、コミュニティとはどういうことなのか、少し整理しておこうと思って、少しだけ大学の先生っぽい話をしようと思います。

コミュニティとは、出会いや別れなど人と人が関わり合う場所のことを言います。地域とコミュニティが同じ意味で使われるのはどうしてかということ、地域というのは、土地によって区切られている、区切りのある土地のことをいいます。

地域は大きなコミュニティですが、その他にも小さなコミュニティがあります。例えば家族や学校などです。

最近ではインターネットや SNS などで同じ言語をやっている仲間たちということで、インターネットコミュニティというものも出てくるようになりました。地面がなくてもコミュニティが成立する時代なのです。僕もパソコンの中には海外の研究者とか、そういう人たちも一緒に交流したり勉強したりしています。目の前にはいないし、土地も一緒ではないのだけど、出会ったり別れたりする、これも関わり合う仲間たちのコミュニティなのです。

岩見沢市も大事なコミュニティ

そうすると、みなさんにはどういうコミュニティが頭に浮かびますか。様々なコミュニティがあるのではないのでしょうか。岩見沢市も大事なコミュニティということになります。今日お話ししたいのは、岩見沢市というコミュニティのことです。

岩見沢市というのは地域のコミュニティです。区切られた土地の中で、色々な人たちと出会い別れる、人と人が関わり合う場ということです。そして、岩見沢市の土地が危機なのではなくて、コミュニティということが危機なのです。つまり、関わり合っ、出会ったり別れたりする場が今失われようとしている、失われるかもしれないという状況にあるわけです。

人の関わりの変化

町を見ても何も変わらないような気がするかもしれませんが、人との関わりは大きく変わってきています。しかもそれが、何十年という単位ではなくて、ほんの数年という間に起こっています。例えば、乳幼児を育てているお母さんたちが働きに出るようになりました。前回調査に比べて 10 パーセントも増えました。こういう状況が起こっていて、これがどんなことになっていくのかを今注視しているということになります。

地域コミュニティの危機

今地域コミュニティは危機にあると全国的にも言われています。おそらく世界的にも言われていると思います。どういうふうに危機なのかを整理しておく、地域のコミュニティは、まだ地縁血縁のコミュニティが機能していたころがありました。過去形で言わなくてはなりません。それでも、岩見沢市ではまだ結構残っていると思っています。なぜかというと、毎年降雪という災害が起こるからです。全然災害として捉えてもらえないですが、同じ量が東京で降ったらもう大変な災害です。なぜ災害として捉えてもらえないかというと、僕らは災害的な積雪に対して準備をしているからです。僕たちは地域の中で何をすればいいかということについて約束事ができているから、なんとかなっているんです。皆で協力し合って生きていくことが大事になってくる。そうした点でまだ地縁血縁が岩見沢には生きています。ただけれども、全体的にはだんだん減ってきています。

岩見沢市の子育ての 3 つの視点

市の説明にも出てきましたが、岩見沢市の子育ての事業は 3 つの視点で分類して捉えています。1 つ



目は「安全」です。これはセーフティネットに関することです。次は「安心」で、危機感はないけど、こういうことがあったら安心して子育てできるという内容です。最後は「笑顔」です。みんなを楽しませたり、豊かになれたりするような活動のところで、3 つに分けて事業を見ていきたいと思いますというふうにしています。その中のセーフティネットとは、人とのつながりはしっかりあって、お醤油貸してと近所の人に言える時代なら、そのとき必要とされるセーフティネットは金銭的なものや、物のサポートがセーフティネットでした。人との関わりはあって助けてもらえるので、お金を提供するとか、失業保険、公的扶助がセーフティネットと言われていました。

社会から孤立する人たち

今は、地域コミュニティの支え合いとか、ともに助け合う力が低下するようになってきました。そうすると今度は、個人や家族が支えを失って社会から放り出されてしまうということが起こるようになりました。テレビの報道などで子どもを殺してしまう、虐待する親がニュースに出ていると思います。

あの報道をみてどう思いますか。ひどい親がいるものだと思われている方は、ちょっと違った角度から考えていただきたいです。それは何かというと、この人たちは社会から放り出されている人たちなのではないかと思ってもらいたいです。

僕は色々な仕事に関わっていますが、ついこの間までは刑務所にいたんです。悪いことをしたわけではなく、平成 18 年に法律が変わって、刑務所に入っている人たちにも、社会で生きていけるような支援が大事だと、ルールが変わり、僕はカウンセラーとして受刑者の人たちに接する仕事をしていました。



セミナー会場の様子

社会からの孤立が虐待のリスクに

僕がそこで会っていた方の中には、子どもを殺してしまった人たちもいました。どんな方々だと思いますか。その方々から話を聞くと必ず出てくるのは、その子たちを一生懸命育ててきたとおっしゃいます。良い親になりたかったし、子どもにも認めてもらいたかったと。だけど、どういうふうに子育てしたら良いか実はよく判らなかつたと言うんです。なぜかという、自分もちゃんと子どもとして育ててもらった記憶がなかつたからだというのです。だから一生懸命インターネットで調べたり、夫婦の中で話をしたりしてみるんだけど、なかなか子どもが想像したようには育ってくれない。育ってくれないとなると、誰かに助けを求めることができなくて、そうした状況の中で、家族の中だけで抜き差しならない関係になってしまい、孤立をして、ついには子どもを殺してしまうということがあるということ、僕は知ることになりました。

子育ては学習性

何が問題かという、親の子育ての仕方が悪いというのはあるのかもしれないけど、それが個人の問題とされているということが問題だとわかってきたわけです。

子育ては本来学習性なのです。誰かから教わるものなのです。性行動も誰かから教わって学ぶものなのです。誰かが教えてくれていたのです。

これらのことは、教わるといっても本を見て教わるのではなくて、手続きとして、やり取りとして、関わり合いとして学んでいくものなんです。しかし、

そういう形がなかなかうまくいっていない、つまり地域コミュニティの支え合いとか、学び合いが段々失われ、個人や家族が地域からの支えを失って社会に放り出されて、しかもその人たちの責任だといって叩かれてしまうという状況が起

こっているのです。学校も叩かれるし家族も叩かれます。親も叩かれる時代なんです。

そうしたら、みんな学校の先生にはなりたくないし、親にもなりたくないし、家族もやってられないということになってきたら、この悪循環はますます子どもたちを減らしてしまう動きになるわけです。何が問題なのかという、地域での支え合いが弱くなってきていると研究者たちは考えています。そこまではみんながわかっていることなのです。

「契約」に基づく専門的サービス

それで、どうしようかということ、地域コミュニティの助け合いに代わって、対人支援サービスというのが生まれるようになりました。

例えば、100歳まで生きるとは人類初のこと、誰もこの先どうなるのかわからないのです。皆さんは世界記録をつくっているわけです。それで、対人支援サービスとして、介護してくれるシステムができるようになりました。

本当は、これまで介護は家族や地域の人と一緒にやってきたことですが、それが段々難しくなってきたわけです。これも地域コミュニティの支え合いが弱くなっていると見ることができ、それはみんなお年寄りになってきたということでもあります。対人支援サービスが保障されるように地方自治体が頑張るようになっていきます。

そうすると今度何が変わってくるかという、地縁血縁に基づく助け合いから、市場原理とか、契約に大人支援サービスに移行することになります。私があなただけの介護を引き受けますから、その代わりに私

を雇ってくださいという形になるわけです。わたしがこの子のサポートをします、保育園で預かりますから、私の給料を保障してくださいということになります。こういう、約束事に基づく専門的なサービスが生まれてくるようになったわけです。

今保育園や放課後等児童デイサービスの事業所が増えています。子どもを預かってくれる場所が結構できています。サービスとして、契約として、約束として。サービスはどんどん専門化するようになっています。契約ですから、ここまではしますけどここからはしませんという、線引きができます。

「縁（出会い）」に基づく共助

縁って難しくてややこしいんです。どこまでも面倒を見ることになってしまうからです。親だというだけで何でもしなければならぬ。子どもだから何でもしなければいけない。これが縁の辛いところです。選べないし、どこまでも付き合っていかなければならないから、どこまでが自分の仕事かわからないという状況になります。

ビジネスならどこまでが仕事ですとやれるけど、逆に言うとそのサービスは専門化されるようになり、縦割りになってきます。これのマイナス面は、他のサービスを誰がしてくれるかについてちゃんと用意していないと、たらい回しのような状況が起こってきます。

サービスとサービスの隙間

サービスとサービスの間に隙間ができてしまうと、そこに人がこぼれ落ちるようになってしまいます。例えば、サービス間でたらい回しになったり、サービスを受ける場所に行くことができず孤立死をしてしまうというような現象につながってきます。

この社会制度という契約制度の中からこぼれ落ちる人たちを、今度はどう支えたらいいのかというのが、今起こっている問題です。

そこからが市民の役割ということになってきます。インフォーマルな、正式なものではない、お給料はもらえていないけど放っておけないと言う人たちが立ち上がって、コミュニティづくりをし始めるわけです。

新しい出会いや別れの場所をみんなで作ろうとい

う動きがセーフティネットと言われるようになっていきます。岩見沢市でやってくれているのは確かにセーフティネットなのだけれども、これで十分かと言うと、残念だけど十分にはならないのです。

新しい地域コミュニティのつくりかた

町の中で出会った仲間が、同じ問題意識を持っている人たちが集まって何かやろうよという動きが起こり始めています。

例えば子ども食堂がありますよね。低所得の、貧困の問題に対して立ち上がった地域の人たちが、子どもたちと一緒に食事をする場所を作る、家族のような、ボランティアで集まって活動をして、今は全国的なものになっています。

あとはフリースクール。僕もやっていました。一軒家を借りて、不登校の子どもたちにいつでも集まっていいよという形で。それで一緒に学びをしたり活動をしたりすることが自主的に行われます。

岩見沢市では冒険あそび場、プレーパークもできました。今の公園は穴を掘ってはだめ、大声を出してはだめと遊びづらくなっています。遊具を置くと大けがをするからといって遊具も撤去されています。

だったら子どもたちが外で遊べるようにと動いてくれる仲間たちがいて、例えば廃校になった小学校で月に1回、子どもたちを見守ってくれる大人たちが集まって、子どもたちがのびのび遊べるような、魅力的なおもちゃや遊具を置くのではなくて、子どもたちが自由に走り回れるような環境を保障する場所を有志たちで作って取り組んでいる人たちがいます。

地域コミュニティは危機？

- 社会制度の間からこぼれ落ちる人々を支える
- インフォーマルな市民によるコミュニティづくりの取り組みがセーフティネットと呼ばれるようになっていきます
- 「子ども食堂」「フリースクール」「プレイパーク」「多世代多機能の居場所」

危機感から生まれる場所

多機能多世代の居場所として、年齢に関係なくみんなでカフェを作ったから、そこでお年寄りの方も

若い方もみんな来て、必要な方はそこで過ごしていただくなんて場所が道内のあちこちででき始めています。

プレイパークや多機能多世代交流の場など、このような取り組みは、こうした地域の中で実感される危機感から生まれているということになります。生活とか給料のためでなくて、この町が大事だからなんとかしようよという、危機だからこそ生まれてくる活動、新しいコミュニティづくりが少しずつ育とうとしています。

僕は子ども・子育て会議の会長を担わせてもらっているというのもあって、こういう場所にとっても関心があります。いずれもどこか懐かしいのだけれど、今まさにこの町に生じている課題を解決するための新しいコミュニティづくりに関心を持っています。こうしたユニークな取り組みについて、市民がそれを評価してくれないと、岩見沢市の中でうまく育って来ません。皆さんにもぜひ参画していただきたいし、応援していただきたいと思っています。

そのほかにも、岩見沢の外にまで目を向けてみると、例えば、認知症の方々がレストランをやって、注文を間違える料理店というのがあります。注文を間違えても全然良いではないですかと認知症を抱えた方々が、イキイキ働いてらっしゃる姿を見ると、そこにまた人々が集まるという状況が起こります。ここの町は認知症になったとしてもこんなに楽しく、生き生きと自分たちを支えてくれるんだとわかったら、この街は子どもたちばかりでなく、大人たちも安心して育っていける場所になってくるのではないかと思います。

フリースクール「ユリーカ」の子どもたち

僕も一軒家を借りて、2001年から2008年までユリーカというフリースクールをやっていました。2008年までなので、閉めてから11年くらい経っています。最初に来た子たちは20歳年をとっているということです。不登校の子どもたちもいます。いわゆる発達障がいと言われているような子もいます。その子たちが10歳くらいで来たとしたら、その子たちは30歳近くになっているのです。

どんな30歳になっていると思いますか。残念ながらほど普通な大人になっています。すごく立派な人に

なるかといったら、そうではないです。だけど、みんな歯を食いしばって立派に生きています。

ユリーカに来た子たちはラッキーだと思います。色々な大人たちが関わってくれました。たとえば、ユリーカに来ていた子どもたちがアルバイトをやってみたく、働く経験を試みたいというので困っていたら、Uさんがお祭りでお店をやろうと申し出てくれました。小さい子たちは売り子としてお手伝いをさせてもらいました。中学生はポテトを揚げて詰めたり、ビールを運んだり、表に出るのが苦手な子は裏方の仕事をやらせてもらいました。

大人と関わるのが得意に

そんなふうにいるんな地域の大人たちに可愛がってもらってきたおかげで彼らはどんな大人になったと思いますか？みんななんとかなるんです。勉強はできなくても、大人と関わるのが得意になったのです。この人は近づいても大丈夫だろうという大人のひとと、あまり近づかない方が良いなという大人のひとがなんとなくわかるんです。早い時期から色々な大人のひとたちや大学生などと関わって可愛がってもらっていると、そういう風に子どもたちは育つのですね。これなら岩見沢でもできるのではないかと思います。

子どもを育むセーフティネットとしてのコミュニティ



このスライドの、この浮世絵が僕は大好きです。この絵を教えてくれたのは、精神分析医の北山修先生です。たぶん僕より年上の方はご存知だと思いますが、彼は、「帰ってきたヨッパライ」とか、「風」「戦争を知らない子供たち」「白い色は恋人の色」などたくさん詞を書いた作詞家でもあります。

子どもとお母さんが見つめ合う

この絵はどんな絵かわかりますか。日本髪の女性がお母さんで、変わった髪の毛、昔は大悟郎カット、今はテクノカットというのでしょうか、そのような髪の子がいます。このお母さんらしき女性の方は右手に何をぶら下げているのでしょうか。これは鯉のぼりです。これを見せて、何かしゃべっている感じがしませんか。これは左上にタイトルが書いてあって、幼稚園と書いてあります。つまり、これはお母さんと子どもではなくて、幼稚園の先生と子どもという構図です。

北山先生は、赤ちゃんとお母さんの関わりが日本ではどんな風に描かれているか、をテーマに浮世絵を題材に研究をされました。ヨーロッパなどの宗教画だとしばしばマリアはあっちを向いているし、子どもも変な方を向いていてということが結構多いのですが、日本の図柄は何かを共に一緒に見つめているというものです。

鯉のぼりと安全・安心

この浮世絵を岩見沢市の子育て支援の施策にあわせてみてみましょう。笑顔はどこにあるかというところ、たぶん、鯉のぼりを一緒に見ているというところ、素敵なものを見せてもらったら楽しいですね。

それでは、安全や安心はどこに描かれているのでしょうか。女性の右手は楽しいもの、鯉のぼりを、笑顔とつながれという思いを込めてをみせてくれています。5月の節句には鯉のぼりという楽しいものがあるのだよと教えてくれている感じがしませんか？

そして左腕は、子どもを抱き上げています。この腕は絶対子どもを落とそうとしないですね。子どもはたぶん、抱かれていることに気付かないくらい鯉のぼりに夢中になっていますよね。足をバタバタしているから、鯉のぼりを見たいのだと思うのです。それで、ちょうどいいところにしっかり抱きかかえてくれている、これが安全や安心ということだと思います。

子どもはこの女性の左腕を疑っていないのです。疑い始めたら安心して遊べないでしょう。いつこの手が離されるかと思ったら怖くて、恐ろしくてしょうがないはず。でも、子どもが気づいていない

ということが大事だと思います。子どもはここで、安全や安心であることに対して疑問を持ったりしないで、のびのびと遊んだり学べるということがとても大事だと僕は思います。

さっき公園の話をしました。公園で大声を出してはいけないと気にしながら遊んでいる子どもたちは、ちっとも楽しくないと思います。安全や安心だと思えていないと思います。

子どもたちがのびのび遊べる環境

何も疑うことなく走り回ったり、自分がしたいことを目一杯できる環境は、こんなに空間や自然環境がたくさんある岩見沢でも意外と少ないのではないかと思いますか。

皆さんが勤めている保育園や幼稚園も、子どもたちにとって安全や安心な場所になっているのでしょうか。安全安心というのは、けがをさせないという意味もあります。心や身体を傷つけないというのももちろん大事だけど、そのせいで自分は遊んでいいのかなと迷っている子どもたちはいないのでしょうか。その子たちが何かをするたびにストップをかけないといけなような状況ばかりでは、とてものびのび遊ぶことはできないのではないのでしょうか。

子どもたちが疑うことなく自分のことを表現できる場や時間はどのように保障されているのでしょうか。こんなことを考えてもらうのが、地域コミュニティでは大事になってくると思います。

子どもの学びと育ちに大切な5つのこと

最後に、子どもの学びと育ちに大切な5つのことについて、紹介します。

子どもの学びと育ちに大切な5つのこと

- ①「子どもと顔を合わせる（みつめあうこと）」
- ②「子どもを支える（かかえること）」
- ③「大人と子どもの関係構築（ともにみること）」
- ④「子ども同士の関係構築支援（つなぐこと）」
- ⑤「子どもに意見を求め、受け止める（問うこと）」

みつめあうこと

1つ目は、みつめあうことです。子どもと顔を合わせることです。Face to face といいます。今これがとても危機にあると思います。iPad だとか、スマホのおかげです。人と人が顔を合わせて交流をする時間が圧倒的に減っています。子育ての中でもそうです。

今、子どもたちがどのようにおんぶやだっこをされているか知っていますか。肩よりも腰のほうで、つまり低いところで、おんぶやだっこをされているのではないのでしょうか。赤ちゃんをだっこしているときに、赤ちゃんの顔にシートがかかっているような抱き方をして、町を歩いているご家族も見かけます。赤ちゃんからみたら、移動している間はマスクをされているわけです。どこを歩いているのかもわかりません。

昔のおんぶは、もっと背中の上のほうのはずです。首のうしろに子どもの顔があるくらいです。暑いしうざくてしょうがないかもしれません。でも料理していると、お母さんの手元が見えるのです。そのようなおんぶをしていたのですが、今はおんぶをする場所がどんどん下がっていて、親と交流ができないような場所に子どもがいるのです。

赤ちゃんの鍼灸・マッサージをやっている鍼灸師の方は、今、赤ちゃんの体が凝り固まってしまっていることを警告します。袋のなかに子どもを入れるような抱っこ紐のおかげで、赤ちゃんは自分で体勢を変えることができないということです。同じ姿勢で何時間もいたらみなさんどうなると思いますか。身体はゴワゴワですよ。そういう形で生活している赤ちゃんたちがいるということです。

これは何度も言いますが親だけの問題ではありま

せん。教えてくれる人たちがいないのです。だから今おんぶの仕方の講習をやっているところがあります。これは恥ずかしいことではなくて、知らないから教えてあげようということです。今、何が足りなくなっているかという、人の顔だと思うのです。

大人たちにはにこにこ笑って頷いてほしい

赤ちゃんや子どもは困った状況になると、近くで頼りになる大人の顔を見ます。そこで実験です。大人がにこにこ笑って頷いてくれているとそれはどんな意味を子どもに伝えることになるのでしょうか。チャレンジしていいよというメッセージです。ちょっと怖い顔をしたら、子どもはブレーキをかけます。これはやっちゃいけないことだと考えます。実はもう8ヵ月くらいから、子どもたちは道徳の勉強をしているのです。

色々なことに積極的な大人に育てたいとしたら、どんなことを大人がしてくれればいいのか。にこにこ笑って頷いていてくれる状況があればいいのです。しかし、どうなるかわからないと心配があ

私たちはまなざしの中で育ってきた

- この世界をどんな風感じて暮らしているか、
- この自分をどんな風感じているか、
- こうした感覚は、
- 実は、周囲のまなざしを通して学び、育ててきたものなのです。

れば、お母さんはたくさんブレーキをかけてしまうと思います。そこで、顔が見えないという状況がたくさん起こってくると、子どもは何を学んだら良いのでしょうか。学校に入って、これはしていいよ、してはいけないよと教えるのではもう遅いのです。

本当は、子どもは生まれて半年を過ぎたころから、社会では何を求められているのか、求められていないのかというのを感覚で学んでいくのです。そのときに大事なことは顔ということになります。

今、その顔が圧倒的に足りないのです。ですから皆さんには、子どもの前で、色々なことにチャレンジしたらいいのだよとぜひ笑顔で伝えていただきたい。実は子どもばかりでなく、僕もそうです。僕は今皆さんの方を向いてお話をしています。これは不

人の顔が読めない子どもたち

今は圧倒的に顔が少なく、人の顔が読めない子どもたちがでてきているのです。発達障がいと言われている子たちの特徴の1つは、相手の感情に気がつきにくいというところなのです。これは脳の話だけではなく、経験もあると思います。トレーニングがとても大事になります。

トレーニングとは特別なものではなく、僕たちがいつも顔をあげているということです。僕はスマホを使うのは決して悪くないと思います。iPadもいいと思います。ただ、iPadで子どもを大人しくさせるのはあまりよくないと思います。にこにこ笑ったり泣いたりして良いではないですか。よしよしと誰かが言ってくれたら、子どもは安心して泣けるわけです。タブレットなんかを使わなくても、子どもは安心安全な場所があればそれだけでいいのです。

大学生は子育ての支援物資

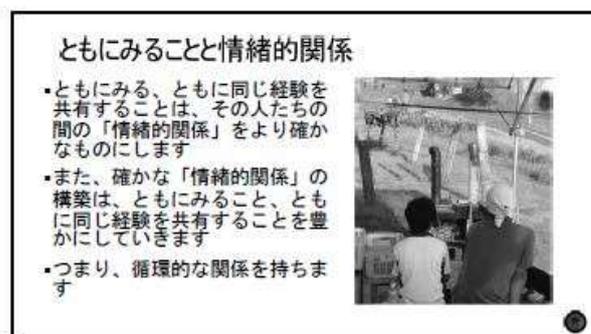
子どもたちに安全だということを疑わせないためには、抱える腕が大事です。でも、子どもを抱き続けるというのは大変です。親だと、何回も抱っこと言われるとこれでいいでしょと段々面倒くさくなってしまいます。

教育大学生はとてもいい人たちで、キャンプなどに行くと、どこまでも付き合ってくれます。大学生は子育ての支援物資なのです。僕はキャンプなど子育て支援の場所に大学生を連れていきます。大学生は子どもが大好きです。しかも、教育大学なので、尚のこと一生懸命やってくれる子が選抜されています。どこまでも付き合ってくれて、そうしてくれることで、子どもたちは親じゃなくなつて安心を与えてくれるのだと知ると、この世界をもっと好きになります。この町を好きになってくれると思って、それで学生を連れて行っています。

ともにみること

3番目はともにみるということです。これは比喻です。同じものを同じように体験した仲間は仲良くなります。僕たちは何かを一緒に見ると仲間と見えます。今日も僕は皆さんと同じスライドを一緒に見えています。学校の先生は、黒板に書いたものを生徒

に見てもらおうという仕事です。一緒に見た人たちは仲間になれるのです。仲間になると、一緒に見ることがしやすくなります。



サン＝テグジュペリという、「星の王子さま」を書いた作家がいます。彼はフランス人なので洒落た言葉をたくさん残しています。「愛する2人は見つめ合うのではない、同じ方向を向くんだ」と言うのです。まず初めに、隣に座って同じものを見るというのが、恋愛上手の一番最初に行うことです。

隣にいてくれる誰かを作っていく

これも学生に教えているのです。彼女ができて最初のデートはどこに行くかという、正面を向くような場所に連れて行ってはだめですよ。お隣に座れるというのがとても大事なのです。だから映画館に行くのです。映画館ではどんな映画を観たら良いですか。恋愛ものはだめです。スクリーンに映っているのは良い男良い女だからです。これは「男はつらいよ」に出てくる寅さんも言っています。だから、映画館で見たら良いのはホラーです。画面をわー怖いとみて、隣を見ると、あ、素敵だと思うわけです。そんなふうにして、隣に座っている二人は良い関係になれるわけです。良い関係になれば、また安心して見ることができます。

こういう、隣にいてくれる誰かを作っていくということが、まちづくりではとても大事になります。安心してどの人とも隣に座れる人たちはこの町を愛してくれている人たちです。そしてまた一緒に座れることで、この町のことを好きになれると良い循環ができます。

今日はみなさんお隣に座っていますよね。お隣に座っている方々は、知り合いでもなければ、偶然座った二人です。この後何が芽生えるかは責任取りませんが、でもそういうことがとても大事になってくるのです。

問うこと

5番目は、問うことです。子どもに聞いてもらいたいのです。子ども・子育て会議でも僕が一番大事だなどと思うことは、子どもたちに聞いてみるということです。この町についてなど、問うというのはこんな作業です。

例えば、保育園や幼稚園が終わったとして、お母さんが迎えに来ます。すぐ子どもを渡すのはもったいないです。担任の先生でも誰でも良いです。今日はどうだった?とか、どう思った?と聞いてほしいのです。けんかをしている子がいたら、やめなさいの前に、どうしたのと聞いてほしいのです。にやに

⑤ 問うこと

- 「どう思う?」
- 「何があったの?」
- 「どんなことを考えていた?」
- 「今日はどうだった?」

以上全体を問うこととします

- これらの言葉を子どもに問うこと
- そして、それを最後まで聞いて
- 全きものと受け止めること

やしている子がいたら、どんなことを考えていたのと。大事なことは、途中で話を切ってしまうのではなく、最後まで話を聞くことです。そして「でもね」の前にまずは「なるほど」と言ってほしいです。これ全体を「問うこと」と言います。

考えて議論するのが大学

どうも大学生は議論をすることが下手です。今日の講義どうでしたと皆さんの感想を聞こうとすると、机の上にあるものを片づけ始めるのです。感想を尋ねることは授業が終わりだと示していると思っているようなのです。大学の授業というのはこれで終わりではなくて、ここからが始まりなのです。教えるので終わりではなくて、考えて議論するというのが大学の場なのです。と言うと、なんですかそれという顔をします。これが学校教育の成果になっています。つまり、一方的に話して終わってしまうということです。そうではなくて、今日1日はどうだったか振り返ってほしいのです。これを幼稚園から始めていただくと、立派な大学生になれると思います。

今日どうだった?と問うこと

今日どうだったと聞くと、今日は面白くなかったと不満を言うかもしれません。そういう子がいたら、そんなこと言わないでと言うのではなくて、なるほど、それはどうして?と聞いてくれたら良いのです。明日も保育園や幼稚園はありますよね。明日もあるから、「じゃあ明日また来てみてよ。何かちょっと変わるかもしれないから。明日また最後に聞くから、感想聞かせてね」と頼めばいいです。子どもは、自分の考えを認めてもらえた、考えてもらえると考えるようになります。これをしてもらいたいのです。ぜひ岩見沢市にも、子ども・子育てのことについて子どもにも聞いてほしいのです。今日の岩見沢市はどうだったか、学校はどうだったかと。

学校の先生にもお願いしたいです。今日の僕の授業はどうでしたと。生徒から「先生の授業がわからなかった」と言われると、くそーという気持ちになるかもしれませんが、そこでなるほどと言ってほしいです。何がわかりにくかったか聞いてくれれば良いのです。そしたら、次の授業でそれがもう少し変わっていたらマルと言ってねと、あまり変わってい

⑤ 問うこと

- 子どもたち一人ひとりの考えを問うことによって
- 自分なりに表現することを認められているし、
- それは歓迎されることであるという
- 私たちからのメッセージを送ることになります

なかったらだめと言ってねと言っていただければ、先生たちはおのずと良い先生になってきます。お父さんやお母さんもおのずと良いお父さんお母さんになれますよね。

子どもの考えを聞きながら自分のやり方を変えていくというのはとても大事なことです。良い先生や良い親になれる一番の方法だと僕は思っています。

では皆さんの保育園・幼稚園で、先生たちはそうやっていますか。保護者が来たらさっと渡してしまうのではないですか。そんなことではいけませんよね。岩見沢市もそういう場になってくれたらいいなと思います。

大きな輪をつくらう

これで、終わりにしますけれども、最後に一言、大きな輪を作りましょうということです。今日はコミュニティづくりということでいくつかの提言をさせてもらいました。岩見沢市の子ども・子育て会議で、僕だけではなく他の委員の先生も一緒に今考えていることの一部について、そういうことをお伝えしたくて、お話しさせていただきました。

地域コミュニティの良いところは、お互いさまといってお互いを支え合えることです。大きな輪が作れるということは、家族や子ども、学校だけの輪ではないのです。もっと大きい輪を描くことができます。

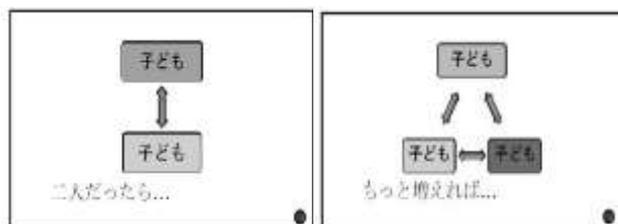
ナナメの関係

タテもヨコもどちらも大事ですが、タテとヨコだけでは町の輪づくりはできません。ナナメの関係が大事なのです。

タテの関係というのは、先生と子、親と子のような関係を言います。ヨコの関係とは、クラスメイトとか仲間という話になります。これらに対してナナメの関係とは、利害関係のない誰かとの関係です。

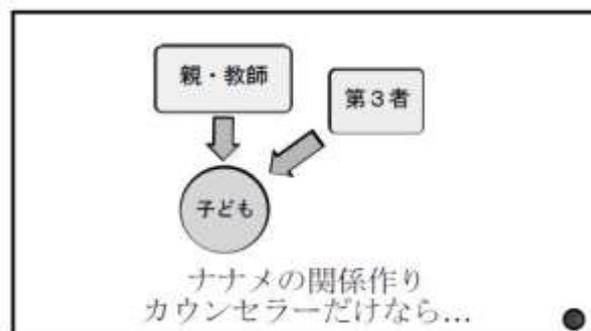
家を建てる時も、必ずタテやヨコに材木を入れるけど、ナナメに材木を入れますよね。これがないと地震に耐えられないのです。そこで、ナナメの力というのが大事になります。

以上を踏まえて、人と人との輪を作っていくアイデアをご紹介します。



資料の図は子ども同士が助け合っている姿です。二人だけだとこんな感じですが、だけど、みんなでやるとだんだんこんな感じになってきます。これはヨコの関係で作れる輪の例です。

次の例はナナメの関係を達成していくとこんな面白いことがあるよということです。



ナナメの関係とは、親と教師と子どもの間に斜めに入ってくるものです。子どもには子ども同士というものもあります。これをやると、こんな輪がつかれます。

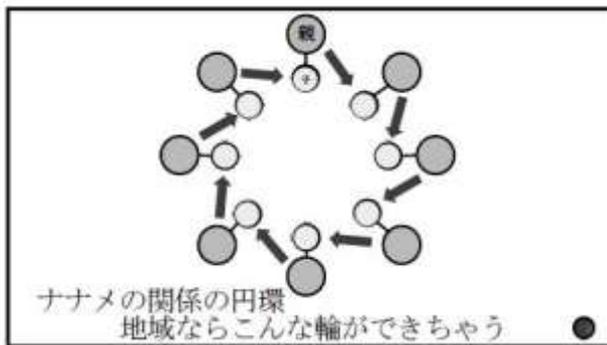


たとえば、このスライドの写真は3世代の人たちが関わっている、関西の冒険あそび場、プレイパークでの写真です。この3人は孫と娘さんとおじいちゃんに見えますが、全員他人なのです。そこに集まった仲間たちなのです。

隣の子どもを可愛がろう運動

親は自分の子どもの良いところを見つけるのが意外と苦手なことが多くありませんか。親は、我が子にもっと良くなってもらいたいから、子どもの足りないところばかり見つけようとしてしまいます。学校の担任の先生もそうなのです。自分のクラスの子どもの課題ばかり探すのです。しかし他人の子どもに対しては優しいのですよ。良い所が見えます。だから、子どもたちは、ウチのお母さんはなぜ自分にばかり厳しいのかと不満を感じることがあります。

それならば、隣の子どもを可愛がろう運動というものをはどうでしょうか。隣の子どもをほめてくれたら、まわりまわって最後に自分の子どもをほめてくれる大人が見つかります。子どものいいところを見つけるのは、親が一番苦手なので、隣の人が見つけてくれたらいいのです。そうするとこんなに大きな輪が作れるようになります。



こんなアイデアを考えるのが僕の仕事です。こういうのをコミュニティデザインと言ったりもしますが、このような循環をつくるにはどんなアイデアを使った方がいいのか。でもこれは僕だけの仕事ではなくて、みんなで一緒に考えると色々面白いアイデアが出てくるわけです。一緒に、どんな大きな輪を作ることができるか考えていただけるといいかなと思います。

子どもを輪の真ん中に

以上で僕の話は終わりです。みなさんと一緒に、子どもをこの輪の真ん中における町にしたいのです。子どもを中心にやると、色々な人たちが関わることができます。僕を中心にといっても誰も応援してくれません。でも、子どものためにというとみんな集まってくれます。そんな岩見沢にみなさんとしていく大きな輪をつくりたいのです。子ども・子育て会議は少なくともそうなりたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました。

平野直己さんのプロフィール

北海道教育大学札幌校臨床心理学研究室教授。専門は臨床心理学・精神分析学。臨床心理士。主な研究内容は、児童期・思春期の心理療法と心理援助、地域実践心理学（地域実践にかかわる心理臨床）、キャンプなどの野外体験活動における体験に関する研究、日本人学校の児童生徒、および教師、保護者のメンタルヘルス支援など。

様々な悩みを抱える子どもの支援にかかわり、フリースクールなどを通して不登校を含む幅広い教育支援活動を継続的に行っている。現在、岩見沢市の子ども・子育て会議委員（会長）を務める。

今年度からは、教育や福祉の面で援助を必要とする方々に対して、心身ともに健やかに育つことができるよう、自然体験や農業体験、社会的文化的活動に参加できる機会を提供し、地域における福祉の増進を図ることを目的に活動している余市教育福祉村の理事長を務めている。